神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The Roles of the Mother Tongue in Foreign Language Teaching

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 1984-11-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中野, 道雄, Nakano, Michio
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2276

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

英語教育における日本語の役割

中 野 道 雄

0.　本稿では，外国語教育〔学習〕における学習者の母語の役割を考えてみたい。

具体的には，我国における中学・高校・大学の英語教育における日本語の使用について論じることになる。

一般に，外国語教育における学習者の母語の利用としては次の三つが考えられる。

a．教授者の指示など，授業の運用に用いる。

b．意味や文法の説明に用いる。

c．外国語・母語間の翻訳をすることで外国語を習得させる。

本稿では，主として，bとcを考えることにする。

1.　外国語教育において母語を排する教授法は，ふつう直接法（direct method）と呼ばれる。それにもさまざまな理念や方法があるが，今は一括して考える。それに対し，母語を導入する教授法は間接法(indirect method)ということになる。(ふつう，文法訳読法(grammar-translation method)とも呼ばれる。)

方法論的には，間接法は，直接法にくらべて分が悪いと言えよう。個人や学校で目覚しい習得効果をあげたという報告は，たいてい，直接法によったものとしてなされる。外国語教育の近代化は，おおむね，間接法から直接法へという方向でなされ，現在，先進国では直接法が当然のことと考えられている。

しかし，日本では，間接法が圧倒的である。それにはそれなりの理由があるのであろう。そこで両方の論点の検討が必要になる。

2. 直接法か間接法か，つまり外国語教育に母語を利用するのか否かを問うときには，少なくとも次の諸条件が考慮されなければならない。

a．授業のプログラムは集中的（intensive）か非集中的（extensive）か？

b．学習者はその外国語に対する強い学習動機（motivation）を持っているか？

c．クラスの人数はどうか？

d．習得した外国語を使用する場面は monolingual か，bilingual か？

例えば，英語を習得して米国に行き，そこで日本や日本語とは特に関係なく，英語のみで生活することが想定されているのか，または，外国と日本の間に立って翻訳や通訳にたずさわったり，日本と外国との間のコミュニケーション連鎖の中で英語を用いるのか？

e．学習者の学年・学習段階はどうか？

一般に次のような結びつきが多い。

直接法　集中的プログラム
学習動機は強い
クラスは小規模
レベルは初・中級
monolingual な応用

間接法　非集中的プログラム
学習動機は弱い[1)]
クラスは大規模
レベルは中・上級
bilingual な応用

1）ただし，大学入試などの間接的動機は強いことが多い。

3. 直接法と間接法の主要な論点は次のようなものである。

a．直接法：母語をとり入れると干渉が生じる。これは例えば次のような例をさす。

this＝これ，that＝あれ，it＝それという対応を教えると

What is this?

（〔自分の持っているものを指して〕これは何ですか？）

It is a pencil.

（それは鉛筆です）

ではうまくいくが

What is that?

（〔壁にかかった絵を指して〕あれは何ですか？）

It is a picture.

（あれは絵です）

What is that?

（〔相手の持っているものを指して〕それは何ですか？）

It is a box of chocolate.

（これはチョコレートの箱です）

では，たちまち合致しなくなる。

間接法：たとえ直接法で行なっても，学習者が母語で思考し理解しようとするのは避けられないので，干渉は不可避である。むしろ，干渉を予測して，これに戦略的に対処した方が効果的である。

b．直接法：母語を用いると，その分，学習者が外国語に触れる時間が少なくなる。この時間は多ければ多いほどよい。

間接法：母語の習得の場合のように，圧倒的に多い時間が保障されているときはよいが，時間が少なく，授業が期間的に分散して行なわれる状況では，直接法によっても，外国語への露出

(exposure)量が中途半端になる。母語によって理解を促進した方が効果的。

c．直接法：直接法では，教授者と学習者の間，学習者と学習者の間のコミュニケーション型授業になるが，間接法では，教授者が問題を与え（読んで訳をせよという場合も含めて）学習者がそれに答えるという方式になる。その外国語でコミュニケーションを行なう能力を養うことを目標とする限り，その演習として直接法の方が秀れている。

間接法：対人コミュニケーション以外に，外国語の文学や文献を読む能力を養うというのも外国語教育の重要な目標である。また教室の授業では，クラス全体の理解をすすめ，確認し，評価する必要があり，この場合は，間接法の方が効率的で明解である。

わが国の現状では，両法のそれぞれの特徴と与えられた条件を勘案して外国語教育が行なわれているわけだが，結果的には，間接法が圧倒的である。そこで，次に，間接法の分析，英語教育において日本語を利用することの有効性を具体的に検討することにする。

4. 外国語教育において母語を利用する場合，教授者は，なぜ母語を利用するのか，そして，それはどのような効果があるのかを明確にする必要がある。

つまり，方法の根本的・合理的な説明である。ここで，ふつう主張される，しかしマイナーと考えられるべき理由づけを検討しておこう。

イ．クラス全員の理解の調整・確認・評価のために利用する。（必要であっても，マイナーな理由であることは明らか。）

ロ．翻訳・通訳の演習として行なう。（しかし bilingual な応用を考えるとしても，翻訳・通訳はその一部にすぎないと思われる。）

ハ．母語の演習になる。（外国語と対比することによって，母語（日本語）に反省を加え，そのより論理的・効率的な運用能力が身につく。（しかし，外国語教育においては，副次的効果の域を出ないであろう。）

このようなマイナーな理由づけに対して，メイジャーな，つまり外国語の理解・習得をより容易にする直接的な理由づけが必要である。

5. 筆者は，本稿において，英語教育における日本語の利用の，合理的理由を持つ一つの形として，翻訳とりわけ直訳を利用する方式を提唱することになるので，ここで翻訳における直訳と意訳の区別をしておく。

直訳とは，翻訳の本来の目的である原文の意味を伝えるということの他に，原文の構造・単語間の意味分担・表現形式などをなるべくそのまま伝えようとする翻訳法である。

意訳とは，意味を伝えることの他に，訳文の文体的な自然さを重んじる翻訳法である。そのため，原文の構造などは訳文に影響させない。

＜例＞

He patted me on the shoulder.

＜意訳＞

「彼は私の肩をたたいた」（文脈によって「彼」を「父」としたり，省略したり，「ポンと」などと副詞的表現を加える。）

＜直訳＞

「彼は私を肩においてたたいた」（pat という動作の目的として，まずその動作を受ける人をあて，続いて，その動作の及ぶ身体の部位を特定化するという英語の表現形式を伝えようとする。）

＜例＞

I am coming (to you).

＜意訳・直訳＞

「行きます」(この例では両方同じになる。「私は」は，この例では省略するほうが日本語では自然だし，直訳方式でも，「私は」を加えることに特にメリットがない。)

この例に対して，「来ます」と訳すのは

行く＝go　　　　来る＝come

という語対応に引きずられたもので，直訳ではなく，誤訳である。同様に

I must go (home) now.

では，直訳・意訳のどちらによっても「もう帰らなければなりません」となる。(意訳では，その上で，「失礼します」「おいとましなければなりません」などとしてもよい。)

つまり，直訳とは，原文の構造・意味分担・表現形式などを，受容言語(target language)で受容可能なかぎり伝えようとする方式である。

6. そのような意味の直訳の効果としては，次のようなものが考えられる。

a．直訳によって英語の構文をより明確に理解させる。

He patted me on the shoulder.

この文を前述のように「彼は私を肩においてたたいた」と訳すことによって，学習者に，英語においては，「彼は私の肩をたたいた」という意味を表わす構文に

He patted my shoulder.

He patted me on the shoulder.

の2種類があることをより明確に意識させることができる。

このような効果は次のような構文においても期待できるだろう。

The winding road led them to a pine grove. (非生物主語構文)

(曲りくねった道が彼らを松林へ導いた)

interestingを単に「おもしろい」とか「興味深い」とさせずに，「おもし

ろがらせる」「興味を覚えさせる」と訳する。同様に interested はおもしろがらされる」「興味を覚えさせられる」と訳する。それによって

His lecture was interesting.

His classes seem interested.

などの文がより明確に理解できるだろう。

この場合は，先に示した I am coming. の場合と違って主語との関係の理解にねらいをおく必要がある。

She is a good dancer.

（彼女は踊りがうまい）<意訳>

（彼女はよい踊り手だ）<直訳>

この直訳は，一面，「彼女は職業的踊り手である」という意味に誤解する（その意味の場合もあるが）おそれもあるが，説明を加えることによって補なう。こうすることによって，例えば次のような文を正しく理解することになるだろう。

The careful writer will avoid this usage.

（注意深い書き手はこの用法を避けるだろう＝文章に注意深くあろうとするなら，この用法は避けたほうがよい）

b．直訳によって，英語の慣用表現形式を明瞭に把握させる。

He fell on his feet in Tokyo.

これは He was lucky (fortunate; favoured by fortune) in Tokyo. という意味だから，直接法ではそのように教えられたり理解されたりするだろう。一方，意訳では，

「彼は東京で幸運にめぐり会った（成功した；うまい目に会った）」

などと文脈に応じて訳すことになるだろう。

しかし直訳方式では，この文が，文字通りには

「彼は東京で自分の足の上に落ちた」

という意味であることに注意を促し，それが「しりもちをついたりしないで，

猫が高いところからとびおりるときに，上手にするように，ふつうに足から着地し，その上に体が乗るように落ちた」の意味になることが説明される。

そうした方がいいのは，同じ発想の大きな慣用表現群があるからである。

I've been back on my feet for two days.

（病気がなおって二日になる）

She is on her feet all day long.

（彼女は一日中忙しく立ち働いている）

She is run off her feet.[2)]

（彼女はてんてこまいをしている）

She was swept off her feet.

（彼女はその歌手に夢中になった）

かつこの中は意訳に近いものだが，これだけに注意を向ければ，これらのイディオム間の共通した発想は把握されないままに終わるだろう。

一方，直訳方式は，あくまで直訳ないしは文字通りの意味を理解させる。それは，その外国語の semantics を体系的に把握しようとすることである。

なお，この表現の発想は，次のような表現ともつながっている。

He fell on his bottom.

（しりもちをついた）

He is sitting on his heels.

（しゃがんでいる）

He jumped to his feet.[3)]

（ぱっと立ち上がった）

c．直訳によってコミュニケーションの構造を理解させる。

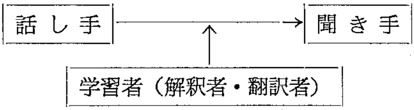
どんな文でも，それは誰かが誰かに向けて発したことばである。外国語学習においては，学習者は，次の二つのいずれかの立場に立つ。

2）offはon と反対に，体の，足(feet)からの分離を示す。
3）to は on にくらべて，座っているなど低い姿勢からの移動を示唆する。

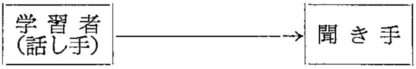
イ．話し手（書き手）・聞き手（読み手）の関係に解釈者・翻訳者として参入する。

ロ．話し手（書き手）になる。

（イ）



（ロ）



外国語を理解するということは，文を断片的な無機物としてとらえるのでなく，このようなコミュニケーション構造の中でとらえることである。

March is the third month of the year.

（3月は1年の3番目の月です）

この訳文は何となく間が抜けている。3月が3番目の月であることは自明で，改めて言う必要がないと感じられる。しかし，英語の March には"3"という意味は含まれていないから上記の文は意味のある文なのである。[4] この文は，英語の March という月についてその趣意で発せられた文である。したがって，それは

「March は1年の3番目の月である」

と訳す必要がある。

同様に

"A happy New Year to you!"

"A Merry Christmas to one and all!"

"A Good New Year and many of them!"

Such are the friendly greetings you hear at Christmas and

4）「弥生は1年の3番目の月です」というのに似た効果を持つ。

New Yera in England.

この文は，イングランドでは，クリスマスや新年に人々がどんなあいさつを交わすかを，それを知らない外国人学習者に対して教えている文だと思われるので

"A Happy New Year to you!"

"A Merry Christmas to one and all!"

"A Good New Year and many of them!"

（このようなのが，イングランドで，クリスマスや新年に耳にする親しみのこもったあいさつです）

と訳すことになる。[5)]（あいさつの部分は原文のまま残す。）

自分が発話者になって，例えば日本的事物名・人名・地名などを英語の中で用いるときにも，相手のことを考える必要がある。

「彼は夏目漱石の小説を読んでいる」

この文を訳すとき，

He is reading a novel by Natsume Soseki.

（相手が漱石を知っている場合）

He is reading a novel by Natsume Soseki, one of the leading novelists in Japan.

（相手が知らないので説明が必要な場合）

He was reading a novel.

（相手は知らないが，特に説明して理解させる必要もない場合）

に分かれるだろう。

5）この文の意味するところは，クリスマスには "A Merry Christmas to one and all!" と言い，新年には"A Happy New Year to you!"と言うというだけでなく，例えば年末に "A Happy New Year to you!" と言ったり，クリスマス前に "A Merry Christmas and a Happy New Year to you!" と言ったりするということも含んでいる。これを意訳して「クリスマスおめでとう／新年おめでとう／」と訳すことはできない。このことは「皆様に幸わせなクリスマスと新年が訪れますことを(祈ります)」と直訳してはじめて理解できることである。しかし全文の訳としては，上述のように，この部分は訳さずに原文のままにすべきであろう。

直訳は，換言すれば，二つの言語をなるべく手を加えないまま比較する作業であって，それによって言語の構造，コミュニケーションの構造を明瞭化しようとする試みである。

7. 以上，直訳方式の効果を述べてきたが，いうまでもなく，外国語教育において，この方式が有効でなかったり，適用不可能な部分も多い。次に直訳方式に何らかの工夫をプラスしなければならない場合を検討する。

a. He stole into the room.

(step, skip, trot, bolt, toddle etc.)

He sprang to his feet.

(jump, leap, rustle, scramble, stagger, struggle, clamber, etc.)

これらの英語表現形式の特徴は，動きの様態を動詞の変化で示し，動作の基本的意味（「入る」「立ち上がる」）やその方向は構文で示すということである。後者は直訳方式で示すことも可能だが，前者の動詞の変化を訳語を与えるだけでカバーすることはできない。それぞれの動詞の意義素を分析し，そのうち様態にかかわる部分がこの構文で活性化されていると見るべきであろう。

b. 直訳によって英語の構造を伝えるといっても，細部にわたって伝えることはできない。日本語と英語が非常に異なった言語であるせいである。

He caught me by the shoulder(s).

He patted me on the shoulder(s).

He prodded me in the side.

このような例で by, on, in といった前置詞の撰択，shoulder(s) などの単複の区別などを訳しわけることは不可能である。

c. The gentleman sitting in front of Mrs Smith started to smoke a cigarette. She raised her eyebrows.

（スミス夫人の隣りに座った男は煙草を吸い出した。彼女は眉を上げた。）

これだけの文でも，英語では，「眉を上げる」という表情は，煙草を吸う行為への不同意・とがめの表情と解釈される。それは，raise one's eyebrows という表情が，従ってその表現が，その意味で慣用的に用いられているからである。この文の書き手は表情を描写することで，読み手が，その表情の意味するところを読みとることを期待している。つまり，読み手は二重構造のメッセージを読むことが必要になる。翻訳においては

「彼女は眉を上げた」(表情の意味の読みは読み手にまかせる。)

「彼女は眉をひそめた」(日本語で同じ意味を表わす表情におきかえる。)

「夫人は抗議するように眉を上げた」(二重のメッセージの意味を両方表現する)

などの方法があるだろうが，大切なのは，書き手がその文で何をどのような形で伝えようとしているかを理解することであって，そのためには，意訳であれ，直訳であれ，翻訳だけでは充分ではない。

8. 本稿では，間接法において，母語を使用するのは，外国語の意味や構造・表現構造を，より正確に，より明瞭に理解するために効果があるからであることを述べた。

ここで直訳とは，ふつう理解されているように，原文の形式的特徴に影響された不自然な文というマイナスのイメージを持つのでなく，学習する外国語の特徴を明示して，学習効果を促進するというプラスのイメージを持った用語として提示されている。

ある言語の意味や構造をより明確に記述するために用いることばとは，一種のメタ言語に他ならない。(ここでは作業用語という用語を用いることにする。) 外国語学習において，作業言語は，学習者の母語でなくてはならないというわけではなく，その外国語そのものであってもよい。しかし，学習者の母語は，母語であるだけに，学習者にとって，もっとも理解しやすい作

業言語である。外国語教育で母語が用いられている理由は，つきつめて言えば，そういうことになるだろう。

人間は，専用の作業言語を持たないから既成の言語を用いることになる。しかし，日本語を作業言語として用いるときには，それはすでに日本語でなく，いわばダッシュつきの日本語であることをわきまえておく必要がある。

同様に，ある英語の意味を，直接法的に英語で記述しても，間接法的に日本語で記述しても，その英語の真の意味は，記述されたものとは常に若干にズレがあるはずである。学習者は，自分でそれを修正することによって，はじめて正確な理解に達する。

外国語教育において，もっとも弊害が多いのは，方法論的硬直であり，本来の趣旨を忘れて，無定見に一つの方法を押し進めることである。本稿では，外国語教育において母語を利用することの本来の意義に考察を加えてみた。

参 考 文 献

J. V. ネウストプニー『外国人とのコミュニケーション』〔特にⅣ「語学教育と外国人」(pp. 120—164)〕岩波新書 1982

中野道雄「発想と表現の比較」(国広哲弥編　日英語比較講座　第5巻『発想と表現』) 大修館書店 1982

J. B. キャロル『言語学と関連領域』〔特に「第二言語の教育」(pp. 182—207)〕大修館書店 1972 (大東百合子訳)